

回顧 2017

論壇

北緊迫… 混迷深めた世界

国内分断と不寛容さの指摘

強硬姿勢をエスカレートさせる北朝鮮。西側の民主主義諸国の揺らぎと中国やロシアに代表される権威主義国の攻勢などを俯瞰すれば、今年は世界の混迷がいつそう深まった1年だった。国内問題を巡っては社会分断や不寛容さが論じられ、国民国家の先行きに不安を抱かせた。

(文化部 小林佑基)

北朝鮮情勢の緊迫化で、日本は戦後最大の危機にあると、多くの論者が指摘した。北朝鮮政治研究の権威、嶋田氏が「金正恩政権は外交戦に出るか」(『外交』44号)で論じたように、北朝鮮の核開発は体制保持を目的とした不可避の行動で、状況次第で引込まれるような外交カードではないからだ。仮に北朝鮮が核武装を遂げれば、日本は絶えず脅され、他の独裁国家やテロ組織がまねをする恐れもある。元海将の香田洋二氏は、北の核で日本と世界が「火の海」になる日(『中央公論』10月号)で、米国がそれを許すはずはなく、北朝鮮攻撃の可能性が高いと見通した。

同様の論考は多いが、一方で同盟国の被害などを考えて攻撃はできないとの見方も根強い。先の嶋田氏は、日本では危機が必要以上に大きく報じられたと指摘。北朝鮮、米、国双方の指導者は感情の起伏が激しく、行動も予想できないと危惧する論考もあった。極右政党の台頭や独立運動などで欧米の民主主義諸国が弱体化する一方、権威主義国は体制維持のため、民主主義



宇野重規氏

富坂聡氏

香田洋二氏

今年の論考 ベスト3

- ◆小黒一正・法政大教授(公共経済学)
・西修「憲法 このままなら、どうなる? 財政規律条項がなければ…」(『正論』6月号)
- ◆亀井善太郎「『こども保険』は誰のためなのか」(『Voice』7月号)
- ◆増田寛也「所有者不明土地が日本中を喰い荒らす」(『中央公論』12月号)

- ◆久米郁男・早稲田大教授(政治学)
・河野勝「なぜ安倍内閣の支持率は復活するのか」(『中央公論』11月号)
- ◆川島真×倉田徹×福田円「座談会 民主と自由の最前線 香港・台湾から考える東アジアの未来」(『世界』8月号)
- ◆保阪正康×広中一成「日中戦争80年『通州事件』の謎を解く」(『文芸春秋』5月号)

- ◆坂元一哉・大阪大教授(国際政治学)
・佐藤智恵(編)「ハーバード10教授が教える日本」(『中央公論』9月号)
- ◆小川栄太郎「追悼 岡田英弘『歴史は文化』近代史学へのアンチテーゼ」(『正論』9月号)
- ◆李相哲「いつまで『開戦前夜』は続くか」(『新潮45』11月号)

国への影響力を高めようとした大胆に動いている、とも指摘された。米大統領選への干渉疑惑も出たロシア。国際秩序の構築や覇権主義が目立つ中国。国際機関研究者のトルステン・ペナー氏は「民主国家に浸透する権威主義」(『フーリン・アフェアーズ・リポート』11月号)で、かつて民主主義を広めようとした欧米は、権威主義国の「しっぺ

返しを受けていると論じた。ジャーナリストの富坂聡氏は「中国夢のゆくえ 第41回」(『Wedge』11月号)で、中国は欧米を見て自国モデルに自信を深めているとし、別の論考では、米国に接近して日本の頭越しに米中が手を結ぶ可能性もあると指摘した。

国際状況が緊迫する中、日本の核政策の再考を促す論考も目立った。主流は非核三原則のうち「持ち込ませず」の解釈を広げ、米国との共有検討などで抑止力を高めようというものだ。ハドソン研究所首席研究員の日高義樹氏は「改憲と核装備を求めるアメリカ」(『Voice』11月号)で、北朝鮮情勢の切り札として、米国の専門家の間で日本の核装備を求める考えが増えていると明かした。

◇国内に目を転じると、社会の分断による連帯の弱まりや、「正義」に反するとみなされると徹底的にたたかれる不寛容さが論じられた。政治学者の宇野重規氏は「ボス

返しを受けていると論じた。ジャーナリストの富坂聡氏は「中国夢のゆくえ 第41回」(『Wedge』11月号)で、中国は欧米を見て自国モデルに自信を深めているとし、別の論考では、米国に接近して日本の頭越しに米中が手を結ぶ可能性もあると指摘した。

国際状況が緊迫する中、日本の核政策の再考を促す論考も目立った。主流は非核三原則のうち「持ち込ませず」の解釈を広げ、米国との共有検討などで抑止力を高めようというものだ。ハドソン研究所首席研究員の日高義樹氏は「改憲と核装備を求めるアメリカ」(『Voice』11月号)で、北朝鮮情勢の切り札として、米国の専門家の間で日本の核装備を求める考えが増えていると明かした。

◇国内に目を転じると、社会の分断による連帯の弱まりや、「正義」に反するとみなされると徹底的にたたかれる不寛容さが論じられた。政治学者の宇野重規氏は「ボス

ト真実、時代の言語と政治

(『中央公論』8月号)で、「国民は一体」との近代国家

の前提が揺らぎ、他者への想

像力が及ばなくなっている

と指摘。極論がはびこり中庸

の人々が沈黙し、妥協点を探

る努力などが失われたとした。

政治学者の飯尾潤氏は「政

党政治の本質的な危機の芽は

『社会をつなぐ力』の弱まり

にある」(『Journal

ism』6月号)で、LIN

E(ライン)などの興隆が身

近な人間関係だけを強化し、

最終的に「国民統合が空洞化

し、分解していく」と論じた。

格差や貧困など生活に関わ

る問題に加え、人口減少に関

連する新たな課題も浮上。空

き家や所有者不明の土地が増

える一方なのに、住宅新築が

止まらないというものだ。建

築学の野沢千絵氏は「産官民

がつくり出した『住宅過剰社

会』の歪み」(『中央公論』

4月号)で、「リーマンショ

ックと同じ事態が起こるの

ではないか」と危ぶんだ。

激動する国際社会にどう対

峙するか。そのために、いか

に国内を安定させるか。難題

から目をそらすに取り組み

ことが、来年はより一層求め

られる。

文化

論 & メディア